



おおぞら

第224号

2025年10月1日発行

発行責任者 山本 貴道

編集者 木部 哲也

<http://www.seirei.or.jp/mikatahara/oozora/>

「浜松市のACP(アドバンス・ケア・プランニング)の 取り組みそして聖隷おおぞら療育センターの ACPの取り組みについて」

看護課長兼おおぞら副所長 沖村 宏美

ACPとは、将来の医療やケアについて、本人、家族、医療・介護チームが前もって話し合い、共有するプロセス(過程・経過)のことです。本人が自分らしい生き方を実現するために、どのような医療やケアを望むのかを具体的に考え、話し合うことを指します。厚生労働省がACPの普及に向けて「人生会議」の愛称と共に国民に呼びかけて6年以上が経過しました。浜松市においても地域包括ケアシステム推進連絡会 ACP部会のなかで市民に対する普及活動が展開されています。私も委員となり今年度で5年目となります。部

会の目的は地域包括ケアシステムのさらなる進化・推進を図るため、医療、介護及び福祉等の連携を元に、住み慣れた地域で共に支え合い、安心していきいきと暮らすことのできる浜松の実現に向けた協議等を行う事と示されています。普及活動としては、医療福祉従事者に向けたACPリーダークリ研修を開催し、今までに207名のリーダークリを養成し所属先でのACPの普及や活動を推進してきました。また、人生の最終段階における医療・ケアに関する話し合いを進めるために浜松版「人生会議手帳」の作成を行い、現在「人生会



議手帳2」も公表される予定です。市民の方々のなかには、人生の最終段階について話し合うことを「縁起でもない」と思われる方もいると思います。しかし、ひとりひとりが自らの望む人生をよりよ

く生きぬくために大切な人と大切なお話(こころづもり)をすることが、自分らしく生き抜く人生につながるのではないかと考え、私は他委員と共に活動しております。

では、おおぞらでのACPの取り組みですが、おおぞら通信第222号で木部所長も述べられていますが、私の視点からお話しさせて頂きたいと思えます。おおぞらの入所者は重症心身障害児(者)であり、自分の意思を自分から表出することが困難な利用者がほとんどです。職員は利用者から表出される限られたサイン(表情・体調等)から利用者理解につなげています。所長回診時には、医師・生活支援員・リハビリ課・栄養課・サービス管理係・看護師と多職種でひとりの利用者について話す機会があります。

それぞれの職種が持っている情報が集約され利用者理解が深まります。そして利用者にとっての快・不快について考えることで利用者に近づくことができると思っています。個人的に私はこの時間が好きです。また、利用者理解を深めながら、今後についても話し合いがされます。そして、利用者にとっての自分らしい人生とは何かと考え、家族面談へとつながっていきます。現在おおぞらで「ACP面談」と呼ばれる面談になります。面談には、ご家族と共に利用者その人らしい人生について多方面から考えたいと思っていますので多職種で参加させて頂いています。そして、私達職員は利用者の近くにいる人として、ご家族と一緒に利用者の人生について考えたいと思っています。

最後に、浜松市民が自分らしい人生を生き抜くために、そして意思表示が困難な利用者が、自分らしい人生を生き抜くことができるように、私は、今後もACPの取り組みを継続していきます。



ほくと

日常活動紹介

眞鍋 仁美

日中、Aさんはリビング全体が見渡せて周囲の声や音、人の動きが感じられる場所で過ごしています。周囲の声や音を良く聞いて他利用者の歌いかけや職員の演奏をにこやかな表情で聞いたり体揺らしていたりすることもありません。また職員の動きもよく見ていて追視していたり、職員が近づき声をかけるとにこやかな表情で職員をじっと見ていることもあります。

日常活動では優しい会話調の語りかけを行いました。語りかけを始めると優しい口調を感じ柔らかい表情に



なります。「ねえ、だっこして」という本では「ちよっとまってね」「あとでね」など語尾が優しく語りかけるようなところのにこやかな表情になっていました。また「わたししってるよ」と言いきるようなフレーズになるとぽつと顔を上げ職員をじっとよく見ながら聞いていました。「14ひきのあさごはん」という本では「おねぼうさんはだれ?」「まだねむそうなのはだれ?」と問いかけるようなフレーズになるとにこやかな表情で職員を見ていました。どちらの本も全体的に優しい語り口調の中で、語尾の上がり下がりや少し口調が強くなるなど小さな変化もよく感じて集中して聞いていました。

歌いかけの活動では、徐々に高音で伸びやかなメロディに変わっていく曲の歌いかけを行いました。『空もとべるはず』ではサビの前の「…輝くすべを求めて」のところ職員をじっと見て聞いていました。サビの部分の「きみと出会った奇跡が…」からは微笑みながら職員をじっと見て聞いて

ていました。サビの前の段々と音程が上がリ盛り上がるのを感じていました。サビの部分の伸びやかなリズムで高音が続く所もいいように注目して聞いている様子が見られました。

職員の操作によって起こる動きや変化に注目する活動も行いました。『あなたがたごさ』の歌いかけに合わせ、歌詞の「さ」の部分でトランプを並べていく活動を行いました。はじめは歌を聞いているように職員の様子を見ていましたが、トランプがら枚ほど並びとトランプに視線を向けていました。並んでいくトランプと職員の手動きをじっと見ており、「にてさ、やいてさ:」のところでは並びリズムが早くなるのを感じ、表情を緩めて見ていました。最後の「かぶせ」のところでも並べたトランプを一気に端に寄せると笑顔になっていました。歌いかけに合わせた手の動きとトランプが並んで行く様子に面白みを感じていました。最後の1気にとランプを寄せるところでは、リズムよく続いていた動きが変わった事と見

た目の変化に面白さを感じているようでした。

これからAさんが興味をもち集中できるように活動を行い、楽しいと感じられる時間にしていきます。

骨折予防勉強会

仲山 利恵

生活支援課

仲山 利恵

骨折予防チームはおおぞら療育センターの利用者の骨折を減らし、安全で健康的な生活を支えることを目的に活動しています。チームは医師、看護師、生活支援員、理学療法士、作業療法士、栄養士の多職種で構成されています。

これまでの取り組みとして、骨折リスクを可視化するため、利用者一人一人の過去の骨折歴や身体的特徴(変形拘縮や筋緊張の有無、姿勢や運動機能など)を分析し「骨折リスクチェックリスト」を作成しました。そこで必要とされる骨折に関する知識、骨折に関わる用語、起こりうるリスクを職員間で共有するため勉強会を開催しました。勉強会には60名(看護師、生活支

援員、訓練士、事務員)が参加しました。参加者の7割以上は経験10年以上の職員でした。

勉強会の内容は、利用者一人一人変形や拘縮の具合(程度)については写真を添付し説明しました。また重症心身障害児(者)の特徴的な変形のある利用者のトランスファーの様子を撮り、実際に職員がどこを支えて抱き上げているのか、どこに難しさを感じているのか、何に気を配っているのかなどを解説しました。職種、所属フロア、経験値関係なく誰が聞いても理解できるように、写真や図を使用し説明しました。そして勉強会終了時にはアンケートを配布し記入をお願いしました。

アンケートの結果は、勉強会の関心度、実践への活用度、勉強会の満足度、いずれの項目も概ね8割以上が肯定的な評価でした。特に、動画(生活の中で骨折リスクの高い場面)での説明はわかりやすかったというご意見をたくさん頂きました。映像は実際に自分が担当するフロアの利用者

だったり、同じような変形拘縮や可動域制限のある利用者として名前があがっていたりして、実際に自分が現場で行なう時に配慮する点がイメージしやすかったのではないかと思いました。今後勉強会で行ったようなトランスファアの実際の様子を映像撮りするなどして自分の担当する利用者一人一人についてチームで共有して欲しいと思います。骨折ハイリスクの利用者の安全なトランスファアはチーム全体で継続的に共有していくことが大事だと考えます。一方、夜勤などマンパワーの問題で理想的な介助が難しいという意見もありました。どの時間帯であっても丁寧なケアを行う必要があると感じました。



今後骨折予防チームは、チェックリストを現場職員に浸透させながら利用者の安全で健康的な生活支援を目指して頑張っていきたいと思っています。

放課後等デイサービス の活動

ひかりの子放課後等デイサービス

松本 悦子

ひかりの子の放課後等デイサービスは静岡県西部の特別支援学校に在学中の重症心身障害のある児童が主な対象です。児童が放課後や土曜日、夏休み等の長期休暇に家庭や学校以外で安心して心地よく過ごせる場所という役割を担っています。そのため、ご家族や学校、並行利用の事業所などと情報共有をしながら連携した支援に努めています。

支援プログラムは集団で行う活動や個々の運動機能や興味関心に合わせた個性のあるリハビリテーション



ンや活動など支援の目的に合わせた形で行います。

集団で行う活動は朝の会や音楽活動、カラーシートやボールなど同じ素材を使った遊びを行い、職員が間に入り児童同士が関わる事ができたり、他児の声や動きを近くで感じたりできるような環境設定で行います。音楽活動の時、Aさんの横で職員が演奏に合わせてタンバリンを鳴らしていましたがBさんが近づいてきました。そして、Bさんも元気な声で歌いながら職員と一緒にタンバリンを叩き始めました。すると、その声やタンバリンの音を近くで聞いていたAさんの表情が次第に和らいでいき、大きな声も出てきて気持ちが高まっている様子が伺えました。職員がBさんに「Aさん、Bさんの歌を聞いて嬉しそうだね」とAさんの様子を伝えるとBさんはAさんの顔を嬉しそうに何度も見つめていました。関わりの中で互いを意識し、心地よい気持ちを共有しているようでした。

個々にじっくりと関わり、一人一人の興味関心に



合わせた活動も行います。

Cさんは声をかけた職員顔をじっと見つめて表情の変化に注目することや手遊び歌の手の動きに注目することがあります。また、手の届く場所に吊るした玩具を自分で揺らしてはその動きをよく見て遊んでいきます。そのため動きの繰り返しや不規則な変化のある活動をしました。カードの片面は黒、もう片面は顔にして交互に見せていきます。始めにカードの黒い面を見せ「1、2、の、3」の掛け声に合わせて裏返し、顔の面を見せるとCさんは声を出して笑っていました。同じように繰り返しと掛け声を聞いただけで笑い、掛け声やカードの絵が変わる変化を面白く感じて

いるようでした。今度はカードを裏返すまでに間を開けると黒い面をじっと見つめて顔の面が出てくるのを待っているようでした。その後、カードを裏返して顔が出てくるとより大きな声を出して笑っていました。カードを裏返すタイミングが不規則になることで期待が持てより面白さを感じているようでした。

また、動きや音の変化を期待して操作できるように箱ドミノをしました。はじめは職員がカラフルな箱ドミノをリズムよく並べていく動きに注目することや箱ドミノが倒れる時の音をじっと聞いて興味を示しているようでした。何回か職員とドミノを倒してみると、次第に自分から箱ドミ





猫たちについて

船越 将康

リレーエッセイ

ノを押すように触れてやりたい気持ちが見られませんでした。1度で倒れないと集中した様子で何回も箱ドミノを押して倒そうとしていました。やっと箱ドミノが倒れるとふっと笑顔になり満

今まで我が家では、10匹以上の猫を飼ってきました。どの子にも思い入れはあるのですが、中でも一番思い出深いチャッピーについて語りたいと思います。チャッピーは、まさに絵に描いたような猫。群れることを好まない、一匹狼的な性格。スン、としたすまし

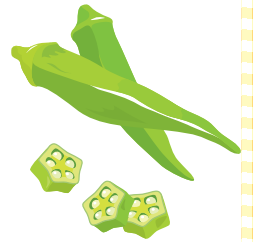
足した表情が伺えました。今後も活動やさまざまな経験を通して新しい発見や一人一人にあった興味関心を広げていけるように支援していきたいと思えます。

顔がクールです。ご飯、おやつの中には猫の可愛さを利用して甘える。食事が終わるとそそくさと、どこかへお散歩です。散歩から帰ってくると、お日様の匂いがします。それもgood。そんなクールで一匹狼的なチャッピーなのですが、私の小指を口に入れて吸うのです。手をぐいぐいと左右交互に押しながら。モミモミしながら吸うのです。これは、母猫の母乳を吸うときの子猫の習性です。最長記録は二時間です。いくら長くても平気です。可愛いんだもの。そんなチャッピーも旅立ってしまいました。今もまた茶トラの「チャー」ちゃんと「あめ」ちゃん、全然なつかない「ノラコ」がいます。どの猫も個性豊かで、とても可愛いです。

おおぞら食事紹介

「オクラ」

毎月19日は「食育の日」です。8月の食育食材は「オクラ」でした。オクラは、生でも茹でてでも焼いても揚げても美味しく食べられます。今回は、カレーに入れてご提供させていただきました。



オクラは、ビタミンやミネラルが豊富で夏バテ予防に効果的です。また、オクラのネバネバ成分には、水溶性食物繊維のペクチンが含まれ腸内環境を整える効果もあります。



オクラの花

オクラ

栄養課 管理栄養士：原・青木・渡瀬

苦情解決委員会

2025年4月～2025年6月
期間中公表を希望される苦情は
ありませんでした。
(期間中、受付した苦情1件でした)

	5月	6月	7月
ショートステイ 利用者数 (延べ利用日数)	49人(239日)	54人(261日)	57人(290日)
放課後デイ 利用者数 (延べ利用日数)	19人(100日)	18人(89日)	21人(114日)
実習者数 (グループ数)	2人(1グループ)	0人(0グループ)	0人(0グループ)

